NOTEBOOK

あるべき未来に進むために

A 普通横罫 40枚 ノ-200PX

NOVEL

あるべき未来に進むために　後日談　ネイルにて

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=17922636

ダイの大冒険, ヒュンケル, マァム, ヒュンマ, レイラ, アバン, レオナ

ヒュンケルとマァムの後日談。終章から４年後。ここから「村のくらし」につながります。
本編７novel/15406332と深い繋がりあり。

全開でヒュンマ。
そうは言っても、肝心なシーンをまったく書いておらず、なんで、いきなりこの状態なんだとの謎仕様になっております・・・。この後日談直前のできごとは、また別の話になります。

実はこのシリーズの終章と、この後日談の間には、もう一つ別のシリーズを入れる予定であり、そのことに関する匂わせ程度の台詞や文章がありますが、後で帳尻を合わせるためのものですので、今の段階では気になさらないでください。

これで、このシリーズはほぼ終わりです。１年以上かかってしまいました・・・。
このシリーズでは、もうひとつだけ、ささやかな小話を書く予定ですが、特に大筋に関係があるものではありません。
ここまでお付き合いいただきありがとうございました。

2022.7.9　ヒュンマスターフェス合わせ。

あるべき未来に進むために　後日談　ネイルにて

　修復したパプニカ城は、白を基調とした洗練された佇まいをしていた。
　その城壁の美しさが、背後の海の青と、互いの色を引き立てあう。その姿は、海辺にたたずむ乙女の立ち姿のようであった。
　現在は女王をいただくこの国では、その乙女の如き城のイメージは、そのまま、この国の統治者の有り様に重なる。
　いずれ、数十年後には、この都は、正義の使徒であった女王にふさわしい、美しく、風光明媚な王都であったと歴史書に記されることだろう。

　大魔王との戦いの後、マァムは、パプニカの女王となったレオナの元を、暇を見つけては訪れていた。それは、あの戦いから数年経った現在も変わってはいなかった。
　レオナは国を空けるわけにはいかず、警備の問題もあることから、パプニカ王都からは動けない。
　しかし、女王とはいってもまだ年若い彼女のこと。その若さで大国の復興と統治という重責を担う彼女を気遣いたいというマァムなりの配慮であった。
　事実、気の置けない友人との語らいは、女王にとって、貴重な息抜きになっていた。
　この日は、陽気もよかったので、レオナの私室で、窓を開け放ち、ふたりきりのささやかなお茶会を催していた。
　窓から入る晩春の風は暖かく、温暖なパプニカの海の匂いをまとって吹き抜けていた。
　レオナは、大きく息を吐くと、天井を仰いだ。
「あ～もう！ほんとーに、毎日、毎日、これでもかっていうくらいに問題起きるのよ！
　港湾の工事をしたいのに予算が足りないとか、調べてみたら、工

事費、持ち逃げされてたとか、王家の直轄地がかすめ取られてて勝手に使われているとか、戦後のどさくさに紛れて勝手なことしてるのが多いんだから！
　こっちはしっかり立て直そうと思っているのに！！」
　レオナの愚痴を、マァムは黙って聞いていた。
「食料生産体制の確保は、やっと軌道に乗ったのよね。
　でも、街道とか港湾とかの整備は追いついてなくて。
　港湾は鬼岩城のせいだけど、街道の方は、大魔王戦というか、そのあとの戦闘のせいでもあるんだけど。
　都の方でも、仕事ない人は大勢いるから、たくさん雇って、早く工事進めたいんだけどね。」
「立派よね、レオナは。」
「やらなきゃいけないこと、決めなきゃいけないこと、たくさんあるからね。
　しょうがないわ。
　ひとつずつ、こなしていっている。」
　そう言いながら、レオナは困ったような笑みを浮かべた。
「ホント、正直言うとね、姉か兄でもいればもっと楽だったのかなって思ったわ。
　でもしょうがないわ。
　これがあたしなんだものね。」
「それがレオナの凄いところよ。」
　レオナの話を聞きながら、マァムは素直に若き女王を称賛した。
　レオナは、一瞬、嬉しそうに微笑んだが、すぐにそれを悪戯っぽい笑みに変えてマァムに向けた。
「ありがとう、マァム。
　じゃあ・・・いまくらいはお姉ちゃんって呼んでいいかしら？」
「レオナったら。」
　マァムはくすりと笑った。
　少しくすぐったい感覚がする。
　でも、このしっかり者のいもうと弟子に甘えられるのは、マァムには、嬉しかった。
　マァムは、出された焼き菓子を口に運びながら、その甘みを味

わった。
　レオナも、優雅な仕草で紅茶を口に運んだ。そんな仕草ひとつとっても洗練されている。こういうところを見ると、やはり彼女は女王なんだと感じられた。
　紅茶で喉を潤しながら、ふと、レオナは、何か思いついたような顔になった。
「ああ、でも、あたしもだけど、アバンの使徒って、みんな一人っ子よね。ダイくん、ポップ、ヒュンケル・・・マァムもね。みんな兄弟いないわよね。」
「そう言えば、そうね。」
　マァムも頷く。
「マァムは、兄弟ほしいって思ったこと、ある？」
　レオナの問いに、マァムは、軽く微笑んで、答えた。あまり考えたことのないことだった。
「私は、村のみんなが兄弟みたいなものだったから。」
「あ、そうなんだ。」
「小さな村で、子どものころからお互いによく知っていたから
ね。」
　マァムは、幾分、苦笑しながら言葉をつづけた。
「そうは言っても、私が村で一番強かったから、私がみんなのお姉ちゃんって感じになっちゃって。」
「マァムらしいわ。」
　そう言って、レオナも笑った。
　ふたりで笑いあっていたが、ふと、マァムは何かを思い出したようにつぶやいた。
「あ・・・でも、あれ・・・。」
「なになに？」
「・・・ううん。きっと夢ね。」
　その言葉に、レオナが食いついた。
「夢？
　なにー？マァム、何か面白い話っぽいんだけど！」
　いつの間にか、レオナは優雅な女王の姿から、噂話を楽しむ年相応の女子の顔になっていた。

マァムは、困ったようにとりなした。
「そんなことないわよ。
　本当に、夢の話よ。」
「聞きたい～！」
　レオナが食いついて離れない。
　レオナの嗅覚が、何かを感じ取っており、その頬は、期待に紅潮していた。
　マァムは苦笑した。
　彼女は諦めて、レオナに夢の話を語り始めた。それは、誰にも話したことない長年彼女の胸に秘めていた小さな想い出であった。
「・・・笑わないでね。
　子どものころから繰り返し見る夢があったの。
　小さな私が、誰かの手を握って、一緒に村までの道を歩いているの。
　森の中みたいなところで。
　たぶん・・・相手は男の子じゃないかしらね。でも、顔は見えなくて。
　私は、その子のことを見上げて、『にいに』って呼んでるの。
　その子の声は聞こえないし、顔もよくわからないんだけど、私に微笑みかけてくれているのはわかるっていう感じで。
　小さい頃からね、その夢を見ると、なんだかその日は幸せな気持ちになっていたの。
　ああ、何か、今日はいいことありそう・・・ってね。」
　マァムの話を聞きながら、レオナは、感心したような声を上げた。
「へえ・・・。」
　そして、いつものように頬を輝かせて、興味深げにマァムに尋ねた。
「ねえねえ、それって、実際にあったことなの？」
　すると、マァムは首を横に振った。
「たぶん・・・ないと思う。」
「そうなの？」
「うん。だって、村に私がそんなふうに呼ぶ男の子っていなかった

もの。
　母さんに、私が子どものころ親しくしていた男の子っていたのって聞いても、村の子の名前しか出てこなかったしね。
　でも、あの夢の中の男の子は、村の子の誰とも印象が違っていて。
　だから、たぶん、そういうお兄さんみたいな人が欲しいって、私が心のどこかで思っていたんじゃないかしら。
　それで、そんな夢を見たんじゃないかってね。」
　レオナは、マァムの話を聞きながら、紅茶を口に運んだ。さっぱりとした味わいが喉を通り抜ける。
　喉を潤しながら、レオナはマァムに言葉を返した。
「ふーん。マァムって、男に頼らないから、ちょっと意外。」
「そう？」
「うん。
　でもいいわね。夢の中でも甘えられるっているのはね。」
「・・・そう、ね。」
　レオナの言葉を聞き、マァムは改めてその夢に思いを馳せた。
　そうか、あの夢を見ると幸せな気持ちになれたというのは、どこかで甘えられるところがあるという安心感だったからかもしれないなと、マァムは初めて思った。
　レオナはマァムに提案した。
「そういうのは占い師に聞いてみると、なにかわかるかもよ。
　その夢にどういう意味があるかは、今度メルルに聞いてみましょうよ。」
「そうね・・・。」
「本当に願望かもしれないしね。
　あ、だったら、今はお兄ちゃん、いるからいいじゃない。
　・・・まあ、あたしから見たら馬鹿兄貴って言いたくなるけどね。頭カタいったらもう！」
　レオナのいう『頭のカタい馬鹿兄貴』が誰を指すかは明確だった。
　マァムは苦笑するほかなかった。
「レオナったら。ヒュンケルは兄じゃないわよ。」

「わかってるわよ。
　好きな人、でしょ？」
「レ、レオナ！！」
　マァムが真っ赤になってレオナを制した。
　だが、レオナもひるまない。
　彼女はにやりと笑うと、わざと慇懃無礼な言い方をしてマァムに尋ね返した。
「え～、違うんですか～？」
「だ、だって・・・。」
　狼狽するマァムに、さらにレオナが畳みかける。
「付き合いだしたんじゃなかったっけ？」
「・・・う、うん。」
「ならいいじゃない。」
　すると、マァムは、頬を赤らめながら、言いにくそうに、レオナに向かって言葉を紡いだ。
「そ、それでね、レオナ・・・。
　レオナには言っておこうと思って・・・。」
「なになに。
　何かあるの？」
　マァムの表情に、ますます、レオナの期待が高まる。紅茶のカップを手に持ちながら、レオナは身を乗り出した。
　対して、マァムは、両手でカップを弄びながら、ためらいつつも、言葉をつづけた。
「あ、あのね・・・近いうちに、私の母さんのところに、ヒュンケルを連れていこうと思って・・・。」
　予想していなかった内容に、レオナは思い切り、ティーカップをソーサーにたたきつけた。
　がちゃんと、陶器の音が響く。
　女王としてはあまりにも不作法であったが、そのくらい、レオナは驚いたのだ。
「えっ！？
　プロポーズされたの！？」
「えっと・・・何て言っていいのか・・・。」

レオナの剣幕に圧倒され、マァムは、どのように返せばよいのか、混乱した。
「私の村に来ないかっていうことだけは、お付き合いする前から、私、ヒュンケルに言ってたんだけどね。」
「・・・ちょっと待って、付き合う前から？」
「だ、だって、ヒュンケルひとりで心配だったし・・・。」
「・・・ヒュンケル、それ、黙って聞いてたの？」
「う、うん・・・。」
　レオナは大きくため息をついた。
　そして、当時のヒュンケルの心情を思い、彼が気の毒になった。
　交際する前から、マァムが、心からヒュンケルを心配して、彼女の生まれ故郷に住まないかと誘ったのだろうということは想像に難くない。
　だが、おそらくは、何年も前から、マァムのことを思い続けて来たであろうヒュンケルにとっては、衝撃的過ぎる言葉であり、また、ある意味、彼を兄弟子としか見ていないとの誤解を与えるものだったに違いない。
　レオナの複雑な心境に気付かず、マァムは、頬を赤らめながら言葉をつづけた。
「な、なんか、そのあとは、うやむやになっちゃってたんだけど、この前、ヒュンケルが、あの、先のこと、少し話してくれて・・・それで、私の母さんにも挨拶したいって言って・・・。」
「それってプロポーズじゃない！
　あーもー！ごちそうさま！」
　心配するだけ損をした。
　レオナは心の底からそう思った。
「でもよかった。
　ヒュンケルは自分から手を伸ばすタイプじゃないし、マァムはマァムで自分よりも周りのこと考えちゃうから、心配だったのよ。
　やっと、収まるところに収まったって感じかな。」
　そして、レオナは、頬杖をつきながら、笑みを浮かべ、片目を閉じた。
「マァム、あの馬鹿兄貴のこと、よろしく頼むわね。」

それは、しっかり者のいもうと弟子からの、精いっぱいの祝辞だった。

　ヒュンケルは足に衝撃を感じると、大地を踏みしめてその場に降り立った。
　そっと目を開けると、周囲には、豊かな森が広がっていた。彼と手をつないだままのマァムが目の前で、彼に向かって微笑んだ。
「よかった。ちゃんと着いた。」
　ヒュンケルは、周囲を見渡しながら、彼女に尋ねた。
「ここが、ネイル村・・・なのか？」
　大きな木々が何本も彼の頭上まで枝を伸ばしており、その隙間から青い空が見える。視線を落とすと、少し離れて小径が見え、木々の間を飛ぶ鳥の羽音が聞こえた。
　美しい森ではあったが、人の姿も建造物も見えなかった。
　マァムは答えた。
「村から少し離れた森の中。
　ごめんなさい、ヒュンケル。どうしても、貴方とこの森を歩いて、村に行きたくて。
　それで、少し離れたところをキメラのつばさの到着地点にしちゃったの。」
　マァムは、申し訳なさそうにヒュンケルにそう言った。
「ああ、そうだったのか。」
「・・・よかった？」
「もちろんだ。案内してくれるんだろう？」
「うん。」
　キメラのつばさでこの森まで飛んでくる間、ずっと繋いだままにしていた手から、ヒュンケルは、ようやく力を抜いた。
　マァムは、するりとその手を離すと、嬉しそうに、踊るような足取りで、彼の前を歩いた。
「向こうに少し行くとね、ブラックベリーの木がたくさんあるの。私、そのベリーで作るジャムが好きでね、母さんと一緒によく採りに行ったわ。」
「そうか。」

「ブラックベリーの木のすぐそばにはね、私が子どもの頃には大きな桑の木もあったんだけどね。いつ頃だったかしら・・・何年も前に枯れちゃったのよね。
　木が枯れるまでは、桑の実も、毎年、たくさんなってて、美味しかったんだけどね。」
「それは・・・残念だったな。」
「うん。
　小さい頃は、よくその木に登ったりしたのよ。」
　そう言いながら、マァムは嬉しそうに頬を紅潮させて話し続けた。
「ふふ。なんだか不思議な気分。
　こうして私が子どもの頃過ごした場所にヒュンケルといるっていうの、不思議。」
「そうか？」
「うん。
　でも、もっともっと見てほしい。
　たくさん伝えたいの。
　たくさん知ってほしい。」
「ああ。教えてくれ。」
　ヒュンケルがそう言うと、マァムは彼に手を差し伸べた。
　ヒュンケルもその手を取る。
　いったんは離れた互いの手が再び握り合わされ、そしてそのまま、ふたりは手を取り合って村までの道の歩みを進めた。
　道すがら、マァムはヒュンケルに言葉をかけた。
「もう少し先に行くと、小川があるの。夏は、そこで水浴びをしたりしてね。」
「あっちの方向だな。」
　そう言ってヒュンケルは、左の方角に視線を向けた。
「あ、わかる？音が聞こえたかしら。」
「ああ・・・。何となくな。」
「ヒュンケル、耳いいものね。」
「・・・ああ・・・。」
　マァムはそう言ったが、実際には、ヒュンケルは、この時小川の

せせらぎが聞こえたわけではなかった。だが、何故かそんな気がした。
　少し歩くと、遠くから水の流れる音が聞こえてきた。
「・・・小川の音がするな。」
「そうね。」
　ヒュンケルは、どことなく違和感を覚え始めていた。だが、マァムは、彼のその戸惑いに気付いていない様子だった。
　ふたりは手をつないだまま、マァムの生まれ故郷へと続く森の小径を歩き続けた。
　道すがら、マァムが幼い頃の思い出を語る。
　先ほどのベリーの木のこと。
　桑の木の木登り。
　小川での水遊び。
　この季節に咲く花々や、母と薬草摘みをしたこと。
　マァムの語る想い出を聞き、森を歩いているうちに、ヒュンケルは奇妙な感覚を覚えていた。
　マァムの話に聞き覚えがあったのだ。
　そして、ひどく懐かしい感慨に捕らわれ始めた。
　時空がゆがみ、いまここにいる自分が２５歳の自分ではなく、もっとずっと若い、いや幼いように感じる不可思議な錯覚が沸き起こった。
「あ、もうすぐ村よ。
　この道を上がったら、あそこがネイル村。」
　マァムは、少し上がり気味になっているまっすぐな小径をヒュンケルに示した。
　森の木々が枝を伸ばし、小径をアーチのように囲んでいた。
　細い道の先には、遠くに屋根や、教会だろうか、まっすぐに空へと伸びる塔が見える。
　その光景が、ヒュンケルの中の遠い感覚を強く揺さぶった。先ほどからの奇妙な感覚が一層強くなった。
　ヒュンケルは、マァムの手を握る左手に力を込めた。つぶやくように、尋ねる。
「・・・マァム。聞いていいか。」

「何？」
「お前の両親の名を・・・もう一度教えてくれないか。」
「え。
　母はレイラ、父はロカ、だけど・・・。
　どうかした？」
　ヒュンケルは、その名を耳にし、噛みしめるように呟いた。
「レイラ・・・ロカ・・・。」
　そして、少し考えるように、彼は目を閉じた。
　どのくらい、そうしていただろうか。
　しばしの後、彼は、目を開き、大きく息を吐いた。
「そうか・・・そうだったんだな。」
　そうして、目を開けたヒュンケルは、ひどく嬉しそうな、感慨深げな表情を浮かべていた。
　マァムが、不思議そうに彼に呼びかけた。
「ヒュンケル？」
「いや、なんでもない。先を急ごうか。お前の母が待っているのだろう？」
「うん。」
　そうして、ヒュンケルはマァムと手をつないだまま、森からネイル村へと続く道を歩いた。
　１７年前の記憶をたどりながら。

　マァムは、自宅の前まで来ると、ヒュンケルにその家を指し示した。
「ここよ。ここが私の家。」
　ヒュンケルにそう案内すると、マァムは、玄関の扉を開け、奥に向かって大きな声で呼びかけた。
「ただいまー！母さん！」
　だが、玄関から見えるリビングには、人影はなかった。
　すると、すぐに、家の裏手から声が上がった。
「こっちよー、マァム。お庭に回って！」
　マァムはすぐに合点がいった。
「あ、庭にいるのね。

ヒュンケル、こっち。」
　すると、マァムが示すよりも早く、ヒュンケルが足を進めた。
「裏庭だな。」
「・・・あ、うん。」
　ずいぶん彼の反応がいいなと思いはしたものの、このときは、
マァムは、それ程おかしいとは思わなかった。
　ふたりで、母の待つ、庭に回ることとした。

　マァムの自宅には、建物の裏手に広い庭が設けられていた。
　その場は、下草が刈り取られて整えられており、建物に近いところには、木製のテーブルと、椅子が置かれていた。
　椅子は、背もたれのあるものもあったが、ただ丸太を切っただけの簡素なものもあった。
　そこに置かれた広い木製テーブルの上には、ティーセットが置かれていた。
　ポットと、カップが３つ。
　大きな皿の上には、焼き菓子が乗せられていた。
　そして、そのテーブルの側に黒髪の女性が立っていた。
　マァムは笑顔で彼女に駆け寄った。
「ただいま、母さん！」
　レイラは、笑顔でマァムを出迎えた。
「おかえりなさい。待っていたわ。
　今日は陽気がいいから、お庭でお茶にしようと思って用意していたのよ。」
「そっか。いいわね。」
「よく帰ってきたわね、マァム。」
　そして、レイラは、マァムの後ろに立つ青年に目を止めた。
　長身の銀髪の青年が、まっすぐにレイラを見つめていた。
「それに・・・ヒュンケル。」
　レイラは、迷うことなく、彼に声を掛けた。
「母さん、彼がね・・・。」
「ええ、わかっているわ、マァム。」
　マァムが、レイラにヒュンケルを紹介しようとしたが、その声を

レイラが制した。
　笑顔だったレイラの面が泣き笑いのような、複雑な色を浮かべた。
　レイラは、ゆっくりと、落ち着いた声で、かみしめるように、ヒュンケルに問いかけた。
「久しぶりね・・・。私を覚えていて？」
　ヒュンケルもまた、感慨深げに、レイラの言葉を受け止めた。
　そして、ひとことずつ、確かめていくように、レイラに言葉を返した。
「お久しぶりです、レイラさん。
　長いこと、御無沙汰をしておりました。」
　そう言って、ヒュンケルは、レイラに向かって丁寧に頭を下げた。
　その声色は、初めて聞く、低く通る声であり、あの頃の少年のものとは変わっていた。
　だが、最後にレイラが見た少年ヒュンケルの姿が、今目の前にいるこの青年にぴったりと重なった。
―お世話になりました、レイラさん、ロカさん。
　この村を出るとき、少年ヒュンケルは、そう言って、レイラと、そしてロカに向かって、丁寧に頭を下げた。
　その言葉遣いが。
　あの頃の大人びた物腰が。
　深く頭を下げたその姿が。
　いま目の前にいる、この青年とぴったりと重なった。
　説明はいらなかった。
　レイラは、言葉にできない何かで感じ取っていた。
　この人は、ヒュンケルだ。あのときの少年だ。間違いない。
　マァムと一緒に遊んでくれた少年。
　アバンが慈しみ、育てていた男の子。
　そして、幼かったマァムが、およめさんになると言った、あの頃の彼女が大好きだった「にいに」。
　生きていてくれたんだ。
　レイラは、その事実をかみしめ、ヒュンケルに声を掛けようとし

た。
　だが、言葉が続かなかった。
　声を出そうとしたのに、言葉は出ず、代わりに、目頭が熱くなった。
　マァムによく似たレイラの瞳が潤み、たちまち、その双眸から、ひとすじ、涙が零れ落ちた。
「・・・大きくなったわね。」
　ようやく言葉にできたひとことを口にしながら、レイラは右手を口元に当て、目を閉じて涙を流した。
　ヒュンケルは、何と言ってよいのかわからず、申し訳なさげに、呟くように応えた。
「ご心配をおかけしました・・・。」
　マァムだけが二人のやり取りの意味がつかめず、戸惑った視線を右往左往させていた。
「え？母さん？
　ヒュンケル？
　二人とも会ったことあるの？」
　すると、レイラは、指先で涙をぬぐいながら娘に返事をした。
「あ、ごめんなさい、マァム。言ってなかったわね。」
　ヒュンケルも、マァムに穏やかな視線を向けながら、彼女の疑問に答えた。
「マァム、俺は・・・この村に来たことがあったんだ。」
「えっ？」
「俺が先生のところにいた、子どもの頃のことだ。
　・・・お前にも、会っていた。」
「え・・・ええっ！？」
　思いもかけないその言葉に、マァムが驚愕の声を上げた。
　そのまま話し込みそうな様子のふたりに、レイラは、椅子をすすめた。
「立ち話もなんだし、座って、ふたりとも。
　今日はいい日だわ。
　ゆっくり話しましょうか。
　懐かしい思い出をね。」

この日は、穏やかな春の日差しが降り注いでおり、日向は温かかった。
　庭に置かれた天然木のテーブルを囲みながら、レイラは、慣れた手つきでハーブティを淹れた。
　三人の間に、レイラの淹れたハーブティが、ほんのりと香り立つ。
　春のうちにレイラが摘んで乾燥させておいた数種類のハーブは、互いの香りを引き立てあい、柔らかな芳香を奏でていた。
　レイラとヒュンケルの話を聞きながら、マァムは、ようやく合点がいったというようにうなずいた。
「じゃあ、私が小さかった頃、ヒュンケルはしばらく、ネイル村にいたのね。アバン先生と一緒に。」
「ああ。」
　ヒュンケルはうなずいた。
「だが、俺も、この村でのことは、ずっと記憶が曖昧だった。
　ぼんやりと、先生と訪れたいくつかの村の記憶があったが、その中で、先生の友人一家と会った、ということくらいしか覚えていなかったんだ。
　先生の友人という若い夫婦と、その二人の娘の小さな女の子がいた、というおぼろげな記憶でしかなかった。」
「そうなの。」
「ああ。だから、マァムの両親が先生とパーティを組んでいたという話を聞いてもピンとこなかった。
　俺にとっては、ロカさんとレイラさんは、先生の友人、としか思っていなかったからな。」
　ヒュンケルは、淡々と語っていたが、ふと、笑みを湛え、遠い記憶を懐かしむような色をその面に浮かべた。
「それが、ついさっき、お前と一緒に森を歩いていて、やっと気づいた。
　俺は、ここに来たことがある。
　あの小さな女の子はお前だったんだな・・・と。
　やっと、思い出せた。」

ヒュンケルは、感慨深げに、そうつぶやいた。
　だが、マァムは、残念そうに、しょんぼりした顔を見せた。
「・・・私、全然覚えてない。」
　その娘のさまに、レイラは苦笑した。
「それはしょうがないわよ。貴方は小さかったんだから。」
「そうだけど・・・残念過ぎる。」
　マァムは不満げに口を尖らせた。
　その様子をヒュンケルは、微笑ましく思ったのだろう、穏やかな目で彼女を見つめていた。
　だが、ヒュンケルは、レイラに視線を向け直すと、笑顔を消した。彼は、ひどく真剣な眼差しでレイラを見つめた。
　レイラもヒュンケルの視線に気付き、彼に目を向けた。
　まっすぐな、それでいてどこか追い詰められたような、強張った表情のまま、ヒュンケルはレイラに言葉を発した。
「レイラさん、久しぶりにお会いして申し訳ないのですが、俺は、本日は、貴方にお話ししたいことがあって参りました。」
「ヒュンケル。」
　マァムがヒュンケルに声を掛けたが、彼は、そのままレイラに向き合っていた。
　ヒュンケルが何を言おうとしているのか、マァムにはわかっていた。
　ヒュンケルは、淡々と、だが、どこか苦し気に、レイラに問いかけた。
「俺が先生の元を離れたこと・・・そして、そのあとどうやって生きてきたのか、貴方はご存じですね。」
　それは、問いではなく、確認だった。
　レイラは、静かにうなずいた。
「ええ・・・知っているわ。」
　すると、ヒュンケルは、その言葉を受け、テーブルに視線を落とした。
　わかりきっていたことだった。
　全世界に触れとして出された大魔王の処刑宣告のため、「アバンの使徒」の中に、元魔王軍の一員、それも幹部がいたことは、広く

知れ渡ってしまった。
　ダイとポップが初めてマァムに会ったとき、マァムの母に世話になったことは、ヒュンケルは、ダイ本人から聞いていた。
　レオナが「最後のアバンの使徒」であることも、誰もが知る自明のこと。
　であれば、「残るひとり」である「最初のアバンの弟子」が「元魔王軍の幹部」になる。
　マァムやアバンがはっきり明言していなくとも、レイラには、ヒュンケルが魔王軍の幹部であったことは、すぐに推測できることであった。
　ヒュンケルは、呻くように、言葉を紡いだ。
「お聞きのとおりです。
　俺は、魔王軍の軍団長でした。
　その俺の指揮で、大勢の人が亡くなりました。
　いまでも、パプニカには、俺を仇と思う人たちが大勢います。
　俺は・・・もう、貴方の知る少年では、ありません。」
　レイラは、ただ黙って、ヒュンケルの言葉を聞いていた。
「俺の過去を隠すことはできない。
　だから、その上で、レイラさん、貴方にお話ししたかった。」
　そして、ヒュンケルは、もう一度、面を上げた。まっすぐな、真摯な瞳が、レイラを見つめた。
「俺は、マァムを愛しています。」
　はっきりと、ヒュンケルは語った。
「魔王軍にいた俺を、その後も闇に落ちそうになった俺を救ってくれたのは、マァムでした。
　マァムがいたから、いまの俺がいる。
　愛しているからこそ、マァムとは離れるべきだと思った時期もありました。
　でも、いまは・・・もう、俺には、マァムのいない人生は考えられない。」
　ヒュンケルは、そこでいったん言葉を区切った。
　必死で感情を抑えているのだろう。
　淡々と語っていながらも、彼の手が、小刻みに震えていること

に、レイラは気付いていた。
　ヒュンケルは、言葉をつづけた。
「俺のような男が、貴方の大事な一人娘に近づくこと、貴方から見て、許し難いことだと思います。
　それでも、俺の過去も、これまでのこともすべてお話したうえで、貴方にお伺いしたかった。
　どうか・・・俺がマァムとともに生きていくことをお許しいただきたい。」
　そう言って、ヒュンケルは、レイラに深く頭を下げた。
　さらりと、彼の銀の髪が流れた。
　少年の頃と変わりないその色を瞳に映しながら、レイラは、彼ではなく愛娘に声を掛けた。
「マァム。」
「母さん・・・。」
　マァムもまた、不安げな瞳で、母を見上げた。
　だが、ただ一人、レイラだけは、先ほどと変わらず微笑みを浮かべていた。
　彼女は、マァムに尋ねた。
「貴方はどう思っているの？」
「わ、私は・・・。」
　とたんに、マァムは真っ赤になった。
　レイラも見たことのない表情だった。
　マァムは、声を詰まらせながら、絞り出すように、言った。
「私もヒュンケルが好き・・・。
　だから一緒にいたい。」
「マァム。」
　ヒュンケルは、顔を上げ、真っ赤になっているマァムを愛おし気に、だが申し訳なさそうに見つめた。
　マァムもまた、ヒュンケルを見上げた。頬を赤らめ、そして、レイラの反応が気になっているのだろう、不安げな色をその面に浮かべていた。
　レイラは、その二人の表情を見て、感じ取った。
　ふたりが、お互いをどれだけ想いあっているのか。

まだこの村にいた頃、マァムは、恋を知らない少女だった。
　村の誰よりも強かった彼女にとって、村の同世代の男の子たちは、弟のように守るべき存在だった。
　ロカとレイラという村の英雄の娘、という立場も、村の中で恋をすることには障害となっていた。
　自分を盾にして村を守り、自らのことよりも人のことばかりを優先してきたこの娘が、様々な感情を知り、いま、こうして、ひとりの男を愛おしく思っている。
　それがレイラには、十分に感じ取れた。
　レイラは、ただひとことだけを二人に告げた。
「なら、私が口をはさむことは何もないわ。」
「レイラさん。」
　レイラは、ヒュンケルに視線を戻した。ヒュンケルもレイラを見る。
「マァムはもう大人よ。
　マァムが自分で選んだ人なら、私が言うことは何もないわ。」
　明らかに安堵の表情を浮かべたヒュンケルに、レイラは微笑みかけた。
「それにね、正直言うと、少し嬉しいの。
　ヒュンケル、貴方が帰ってきてくれて。」
「えっ？」
「アバン様だけではないわ。私もロカも、貴方のことをずっと心配していた・・・。
　だから、貴方が生きていてくれて、そしてこうして、またこの村に来てくれた。
　それだけで、私には十分だわ。」
　そして、レイラは、晴れやかな笑みをヒュンケルに向け、告げた。
「お帰りなさい、ヒュンケル。
　そして、ようこそ、ネイル村へ。
　貴方をこの村の一員として歓迎するわ。」

　レイラは、教会のドアを叩いた。

「こんにちは。」
　教会には、神父の地位をレイラの父アリアムから継いだ男がおり、祭壇の前で、明日の礼拝の準備をしていた。
　レイラの従兄弟だという彼は、レイラを見ると、笑顔を浮かべた。
「やあ、レイラ。」
　この日は、アリアムも教会に出てきており、礼拝の準備を手伝っていた。
　アリアムは、レイラを認めると、声を掛けた。
「レイラ・・・彼かね。」
　アリアムは、レイラの背後で、マァムと並んで立つヒュンケルの姿を認めていた。
　レイラは、軽く後ろを振り返ると、アリアムに答えた。
「ええ、お父様。」
　アリアムの視線に気付いたヒュンケルは、その長身をかがめて、丁寧にその老年の元神父に頭を下げた。
「初めてお目にかかります。
　ヒュンケルと申します。」
　マァムは、幾分か頬を赤らめ、アリアムにヒュンケルを紹介しようとした。
「あ、あのね、おじいちゃん・・・。
　彼が、あの・・・私の・・・。」
　言葉が続かなかったが、その恥じらう面が、マァムの心情を雄弁に物語っていた。
　アリアムは目を細めた。そして、柔和な笑みを孫娘に向かって浮かべた。
「はは。
　お転婆マァムにいい人ができたんだな。」
「お、おじいちゃん！」
　アリアムは、ヒュンケルに視線を止めると、静かに語り掛けた。
「ヒュンケル。
　初めまして、ではないな。
　貴方は覚えていないかもしれないが、私は、貴方に会ったことが

ある。
　アバン様の連れて来た少年が、貴方だね？」
「・・・はい。」
「一人目の、アバンの使徒。」
「はい・・・。」
　ヒュンケルは、うなずくほかなかった。
　アリアムのその表現は、ヒュンケルのもう一つの立場を知っていることを、暗に示していた。
　マァムは、アリアムと、このネイル村の現在の神父を交互に見ながら、語り掛けた
「あのね、おじいちゃん、おじさん。
　今日はね、お願いがあってきたの。」
　マァムは、ふたりを視界に映しながら、懸命に言葉を紡いだ。
「彼は、ヒュンケルは・・・私にとって、とても大切な人です。
　私・・・彼と一緒に生きていきたい。
　私にとっては、この村もすごく大事で、でも、彼のことも大切なの。
　だから・・・この村で、私は、彼と一緒に生きていきたい。」
　マァムの明確な言葉は、澄んだ響きを持って、ふたりに届けられた。その言葉自体が、穢れのない水晶のように光を帯びていた。
　神父は、年かさのアリアムに視線を送った。答えを促す。神父の地位を退いたとはいえ、ここで答えるべきは、年長者であるアリアムだった。
　アリアムは、マァムに向かって笑みを浮かべていた。やがて、アリアムは、マァムと、ヒュンケルに交互に視線を送ると、静かに答えた。
「マァム、ヒュンケル。
　貴方たちが今日、ここに来たのも、神のお導きによるものだろう。」
　そして、過去を懐かしむように目を細めた。
「かつて、この村を訪れたアバン様とロカをそのまま見過ごすことができず、レイラは村を出ようとした。私は、そのレイラを破門にして、送り出した。

マァムは、アバン様の意志を継ぐダイくん、ポップくんを支えるために、この村を出た。
　貴方たちが戦い、勝ち取った世界が、いまの世の中だ。
　貴方たち若者のために、この世界は開かれている。
　過去が何であろうともな・・・。」
　アリアムの言葉に、神父は深くうなずいた。アリアムの言わんとすることを理解したことを示していた。
　そして、神父は、マァムとヒュンケルに言葉をかけた。
「マァム、そしてヒュンケル。
　君たちに、このネイル村を守護する天使のお導きがあらんことを。」
　それは、承認と、そして祝福の言葉だった。

　レイラの自宅まで帰ってくると、マァムはやっと一息をついた。
「こんなに疲れると思わなかった。」
　マァムの後から家の中に入ってきたレイラは、娘たちに着座を促した。
「お疲れ様、マァム。ヒュンケル。
　座って。
　お茶を淹れるわね。」
「ありがとうございます。」
　レイラの言葉に甘えて、マァムは、リビングの椅子に腰を下ろした。
　この日、レイラの案内で、マァムは、ヒュンケルを村の有力者に紹介して回った。
　村の人々に、ヒュンケルの過去をどうみられるのか、マァムは心配だった。
　しかし、もともとレイラが根回しをしてくれていたため、思いのほか、すんなりとヒュンケルは受け入れられた。
　その話の中で、ヒュンケルが幼い頃、アバンと一緒にこの村に滞在していたことを出して、思い出話に花を咲かせる者もいた。
　マァムは、今日一日を振り返り、しみじみと呟いた。
「それにしても意外だったわ・・・。

ヒュンケルのこと知っている人、結構いるのね。」
　すると、台所からレイラの声が飛んできた。
「２０年も経ってないものね。
　大人からしたら、昨日のことみたいなものよ。」
「若い人でもいたじゃない。
　教会から出るなり、『昔、この村に来たことないか？試合に出なかったか？』なんて聞かれたらびっくりするわよ。」
「先生と一緒にいた、というのが、印象が強いんだろうな。」
「それだけじゃないわ。
　絶対、ヒュンケル自身の印象もあるわよ！」
　何故か、懸命にマァムは訴えた。
　そして、ふと、何か考えるように視線を上げると、マァムは、大きくため息をついた。
「ああ・・・なんで私だけ覚えてないんだろう・・・。
　いいな・・・母さんもヒュンケルも、その頃のこと覚えていて。」
「マァム。」
「マァムは小さかったものね。」
　レイラは、苦笑しながら台所から戻ってきた。竈の湯が沸くのに少し時間がかかるのだ。
「だって、私も小さい頃のヒュンケルのこと、思い出したいもの！」
　マァムは、不満げに口をとがらせた。しかし、彼女は、ぱっと表情を明るくすると、レイラに詰め寄った。
「母さんは、その頃のヒュンケルのこと、よく覚えているんでしょう？」
「ええ、もちろん。」
「聞かせて。
　聞きたい。」
「ええ、いいわよ。」
　すると、ヒュンケルが、複雑そうな顔を見せた。
「レイラさん・・・。あの頃のことは・・・。」
「可愛かったわよね、ヒュンケル。あの頃の貴方は本当に可愛い男

の子だったわ。」
「・・・そうでしょうか。」
　ヒュンケルとしては、アバンに反発ばかりしていたあの頃は、身体だけではなく、心もまさに幼く、当時のことを語られることには気恥ずかしさしかなかった。その当時のことを、レイラに可愛いと評されるのは、なんだか居心地が悪かった。
　しかし、レイラは、そんな複雑そうな色を浮かべるヒュンケルにかまわず、はっきりとうなずいた。
「ええ。
　アバン様には意地を張っていたところもあったけれど、マァムの面倒はよく見てくれていたし、私にもロカにも礼儀正しかったわ。」
「へえ～。」
　マァムは、興味深げにレイラの言葉を聞いていた。
「マァムもよく懐いていたわね。
　ああ、でも、マァムは、『ヒュンケル』って発音できなくてね。あの頃の貴方は小さかったから。
　それで、ヒュンケルのことを『にいに』って呼んでいたわね。」
「え・・・？」
　そのレイラの台詞に、マァムは言葉を失った。
　急激に、夢の中の風景が蘇る。
　幼い彼女自身が「にいに」と呼ぶ声が、耳の中で響いた。
　この村に、マァムがそんなふうに呼ぶ少年はいなかった。
　レイラに聞いても、マァムが親しくしていた男の子については、村の少年の名前しか上がらなかった。
　だから、夢だと思っていたのだ。
　夢の中で、幼いマァムが「にいに」と呼んでいた、顔の見えない少年。
　現実に存在しえない美しい心象風景。
　その中にしか存在しないもののはずだった。
　マァムは、上ずった声で、レイラに尋ね返した。
「にいに・・・って？」
「ええ、そうよ。」

「・・・ヒュンケルを？」
「ええ。」
　何でもないことのようにレイラが答える。
　マァムは、呆然とした面持ちのまま、両手で口元を覆った。
「・・・うそ・・・夢じゃなかったの・・・？
　だって、あれは、夢の中にしかなくて・・・。」
　マァムの視界が揺らめいた。
　滲んでよく見えない。
　今にも泣きだしそうに震えるマァムにヒュンケルが驚き、彼女の肩に手を置いた。
「どうした、マァム？」
　マァムが揺れる瞳のまま、ヒュンケルを見上げた。
「・・・ヒュンケル。
　貴方だったの・・・？」
「え？」
　ヒュンケルは、マァムの言葉の意味が分からず、戸惑った。
　何かを察したレイラは、席を立って台所に戻った。
　マァムは、震える手でヒュンケルのシャツをつかむと、その胸に頬を埋めた。
　幼いころから、マァムはこの村の守り手だった。
　誰にも頼ることはせず、村の誰よりも強い戦士だった。
　その彼女は、夢の中でしか甘えることができなかった。
　ぼんやりとした風景に浮かぶ、幼い自分と少年。
　甘えた声で「にいに」と呼ぶと、微笑みが返される。
　夢だと分かっていながら、その夢を見た日の朝は、何故か幸せな気持ちになれた。
　あれは、現実に存在しない、幻の風景のはずだったのに。
「・・・貴方は、ずっと前から、私を支えてくれていたのね・・・。」
　マァムは、ヒュンケルの胸元に頬を寄せたまま呟いた。
そして、ふわりと、自身の髪を撫でる大きな手を感じた。
　マァムは目を閉じた。
　温かい。

ああ、この手だ。
　マァムは思った。
　自分を支えてくれる、温かい大きな手。
　それは、夢の中で、幼い彼女が握っていたあの少年のものと同じだった。

　ヒュンケルは、木陰の下、その碑の前に無言で佇んでいた。
　磨き上げられ、角の取れた四角形の石には、文字が刻み込まれていた。
　そこには、彼の知る人物の名が刻み込まれていた。
　ヒュンケルは、その前に片膝をつき、軽く頭を垂れた。
　そして、そのまま、沈黙を保っていた。
　静寂が場を支配していた。
　時折耳に届く葉擦れの音色だけが、この世にまだ音が残っているのだということを告げていた。
　ヒュンケルは、頭を下げて視界を閉じており、傍目には、ただその静寂に身を浸しているだけのようにも思えた。
　しかし、そうではないことを知っているマァムは、彼から少し離れたまま、その無音を妨げることなく、彼を見守っていた。
　どのくらいの時間が経ったであろうか。
　やがて、ヒュンケルは、ゆっくりと顔を上げ、その碑に刻まれた名を視界に映した。
　そして、立ち上がると、最後にもう一度、丁寧に頭を下げた。
　かつて、この村を出た少年の日にそうしたように。
「ヒュンケル。」
　マァムが彼を呼んだ。ヒュンケルも振り返る。
　マァムは、穏やかな微笑みを浮かべて、彼を見つめていた。
「十分話せた？」
　すると、ヒュンケルは、何かふっきれたような、長年の懸念を取り払ったかのような笑顔を浮かべると、マァムに応えた。
「ああ。ありがとう。」
　マァムは首を横に振った。
「私の方こそ。

ありがとう。
父さんに、会いに来てくれて。」
そうして、マァムは、父の名を刻んだ墓石をその瞳に映した。
ネイル村の外から来たマァムの父、ロカは、今はこの石の下に眠っている。
教会の裏手、よく管理された村人たちの墓地の中、明るい日差しの差し込む緑の中で、その男は眠っていた。
その場は、下草が丁寧に刈り取られており、周辺を囲む木々が優しい木陰を作っていた。
日差しは広く差し込み、もの悲しさもほの暗さもない。
村人たちの憩いの場だった。
そこは、墓地というには、明るすぎた。
地底魔城のアンデッドたちの眠っていた棺とは全く異なる、太陽の恩恵のあるこの場が、ヒュンケルにはまぶしかった。
だが、あの明るい男が眠るにはふさわしい。
ヒュンケルは、もう一度、ロカの墓石に視線を落とした。
穏やかな目だったが、どこか寂しさを湛えていた。
ヒュンケルは、ぽつりとつぶやいた。
「・・・もう一度、お会いしたかった。」
マァムは、そっとヒュンケルの手に自分の手を絡めた。
その温かさが、ヒュンケルを現実につなぎとめている。
マァムは、ヒュンケルに微笑みかけた。
「そろそろ戻りましょう。」
「・・・ああ、そうだな。」
ヒュンケルもうなずいた。
マァムは、亡き父に向かって呼びかけた。
「父さん、また来るわね。」
葉擦れの音が、その言葉に応えるように、鳴った。

墓地の入り口では、教会の神父がふたりを待っていた。
ふたりは、通してもらった礼を述べると、頭を下げ、教会を後にした。
帰る道すがら、マァムはヒュンケルに尋ねた。

「父さんと、どんな話をしたの？」
「ああ・・・。
　遅くなってすみませんでした、と。」
　そして、ヒュンケルは、ぽつりと語った。
「最後に別れたとき、ロカさんは、俺に言ってくれた。
　また来たら、鍛えてやる、と。
　俺は、お願いします、と答えた。
　その約束を果たせなかったな、と思った。
　だから、遅くなってすみませんでした、と・・・。」
　そう言う彼の横顔は、どこか寂しげであった。
「そうなんだ。」
　マァムは相槌を打った。
　そのまま、彼の横を歩いていたが、不意に、マァムの唇から、言葉が零れた。
「でもちょっと、父さんがうらやましい。」
「え？」
「だって、ヒュンケルと約束していたんでしょう？」
　そう言って、マァムはヒュンケルを見上げた。
　不思議そうにマァムを見るヒュンケルに向かって、マァムも、やはりほんの少し、寂しさをうかがわせる笑みを浮かべた。
「私は・・・小さかったから、そんなことなかったから・・・。
　ちょっとうらやましいって、思っちゃった。」
　そう言って、マァムは視線を落とした。
　ヒュンケルは、ネイル村を訪れ、レイラと再会して以来、折に触れてこの村の景色や人々に接するうちに、当時の記憶が少しずつ蘇ってきていた。
　だが、当時８歳であったヒュンケルに対し、マァムはわずか３歳。ヒュンケルがこの村にいたときのことを思い出せという方が無理な年齢であった。
　頭では理解しているものの、マァムは、当時のことを懐かしそうにヒュンケルと語り合うレイラや村の人々を目にするたびに、ほんの少しの寂しさを感じていた。
　だが、ヒュンケルは、マァムはから視線を逸らすと、ぽつりとひ

とこと、呟いた。
「・・・ある。」
「え？」
　彼にしては、実に小さな声だったから、マァムは一瞬聞き逃した。
　見上げると、ヒュンケルがマァムから顔を背け、右手で口元を覆っていた。気のせいだろうか、頬が赤らんでいるように見えた。
　ヒュンケルは、しばし、ためらっていたようであった。マァムの視線を感じているだろうに、言葉を返さず、沈黙を維持していた。
　だが、やがて、思い切ったように、ひとこと、口にした。
　気のせいではなく、その頬は、赤くなっていた。
「あるんだ、お前と約束したことが。」
「え？
　本当？
　私、覚えてない・・・。
　あ、ヒュンケル、覚えてるのね？
　教えて！」
　マァムは、ヒュンケルに飛びつくようにそう言った。
　ないと思っていたはずの宝物を見つけたかのような、期待に満ちた目で、マァムはヒュンケルを見つめた。
　だが、ヒュンケルは、しばらくの間、黙ったままでいた。
　彼は、言葉が継げずにいるような、なにか迷っているような、そんな様子で考え込んでいた。
「・・・ヒュンケル？」
　マァムが心配そうに彼を呼んだ。
　彼女を不安にさせているのに気付いたのだろう。
　ヒュンケルは、いったん目を閉じると、手で顔を押さえたまま、意を決したように、ひとこと、呟いた。
「・・・およめさん。」
「え？」
　あまりにも、彼が普段使う言葉とかけ離れた単語が飛び出してきて、マァムは戸惑った。
　ヒュンケルが何を言ったのか、理解ができなかった。

マァムの脳裏を疑問符が支配し、彼女は、目を丸くしてヒュンケルを見上げたまま、動けなくなった。
　一方のヒュンケルは、真っ赤になったまま、それ以上の言葉を紡げずにいた。
　ヒュンケルもまた、そのまま、硬直したように動けず、しばし沈黙していた。
　だが、じっと注がれるマァムの視線を強く感じたのだろう。ヒュンケルは、振り切るように言葉を継いだ。
「およめさんにする、と約束したんだ。
　お前と。」
「えっ・・・えええええっ！？！？
　ど、どういうこと？」
　全く思ってもいなかった彼の言葉に、今度はマァムが狼狽した。
　ヒュンケルに詰め寄る。
　だが、彼は、マァムを直視できなくなっており、視線を逸らしたまま呻いた。
「・・・これ以上は勘弁してくれ・・・。」
「えっ、えっ、じゃ、じゃあ、母さんに聞けばわかる？」
「待ってくれ！それも困る！！」
　ヒュンケルは、必死になってマァムを止めた。マァムがレイラに対し、当時のことを根掘り葉掘り聞きだそうとするのは、それも避けたかった。
　マァムは、困ったように、眉根を寄せた。
「だ、だって、ヒュンケル・・・！」
　ヒュンケルは、諦めたように息を吐いた。
　どうやら自分で説明するほかはないようだ。
　ヒュンケルは、観念し、ようやく、当時のことを語り始めた。
「・・・あの頃、小さかったお前が、その・・・俺のおよめさんになるって言ったんだ・・・。
　だから・・・その・・・俺もだな・・・。」
　今度は、マァムは真っ赤になる番だった。
　両手で自分の頬を覆い、どうしていいのかわからないように、悲鳴のように声を上げた。

「う、うそっ！！私、そんなこと言ってたの！？」
「・・・可愛らしかったけどな。」
　ヒュンケルは、少し落ち着いたのか、ようやく笑顔を見せた。
　彼の脳裏には、あの頃の幼かったマァムの姿が思い出されていた。
　マァムは、しばらくの間、赤い顔をしたまま、落ち着きなく、そわそわとしていた。
　だが、少しずつ、彼の言葉をかみしめたのか、嬉しそうな笑みを浮かべた。目元は、わずかにうるんでいるように見えた。
「じゃあ・・・ヒュンケルは・・・私との約束を守ってくれたのね・・・。」
　しかし、ヒュンケルは、マァムのその言葉をたちどころに否定した。
「それは違う、マァム。」
「ヒュンケル？」
「俺は、あのときの約束を守ったわけじゃない。
　先生と一緒に旅をした時に出会った子がお前だったということも、この村に来てようやく思い出せた。
　お前と過ごした記憶も、あのときの約束も、最近になって、やっと、思い出せるようになったんだ。」
　ヒュンケルは、マァムを見つめたまま、言葉をつづけた。
「俺は、あのときの約束を守ったわけじゃない。
　ただ・・・もう一度お前に出会って、もう一度、お前に惹かれ、愛した。
　それだけだ。」
　そうして、穏やかに微笑むと、そっと、マァムの頬にその手を伸ばした。彼の指先が、わずかに、マァムの頬に触れた。
「きっと、何度出会っても、俺はお前に惹かれる。
　・・・お前に恋をする。」
　真摯な視線が、マァムを捕らえていた。
　普段は冷静な彼の眼差しが熱を帯び、訴えかけるようにマァムに注がれていた。
「・・・だったら、なおのこと嬉しいわ。」

マァムは愛おしげに、自身の頬に触れたヒュンケルの手に、己の手を重ね合わせた。互いの温かさが伝わりあい、広がってゆく。
　マァムは、少しの間、その温もりを味わうように目を閉じた。
　そうして、目を開けると、滲む視界にヒュンケルを映した。
「私も同じだもの。
　記憶にもないような子どもの頃の私も、貴方が好きだった。
　私の夢の中に、貴方のことが残るくらいに。
　貴方のことは記憶の中から零れ落ちていたのに・・・。
　あの地底魔城でもう一度、貴方に出会って、自分でもわからないうちに、恋に落ちていた。」
　そして、潤んだ瞳でヒュンケルを見上げ、マァムは、彼と同じ言葉を口にした。
「きっと、何度出会っても、私は貴方に恋をする。」
　ヒュンケルは、マァムを抱き寄せた。その腕の中に、彼女を包み込む。
「マァム・・・愛している。」
「私も、貴方が好き。」
　マァムは、そっと、自身を抱きしめるヒュンケルの腕に手を添えた。

　ネイル村の新居の窓から覗く夜空には、半円の月がのぼっていた。
　マァムは、ベッドに横たわったまま、窓の外を見上げた。
　ベッドの向かいの窓からは、村を取り巻く森の木々が、黒々とした影を見せており、その樹の上すれすれに、半円状の月が引っかかるように上っていた。
　窓から差し込む月あかりがほのかな光源となっており、暗闇に慣れた目には、十分な明るさだった。
　マァムは、けだるい疲労感に包まれたまま、薄手の上掛けを引き寄せた。裸の胸元を隠す。
　ヒュンケルは、マァムの隣で体を起こすと、チェストの上に置かれた水差しを手に取った。
　コップに水を注ぎ、体に水分を取り込むと、マァムに振り返ろう

とした。
「飲むか？」
「・・・大丈夫・・・。」
　そう言いながら、マァムは体を起こした。
　そして、目の前の、ヒュンケルの裸の背に抱きついた。
　ヒュンケルの苦笑気味の声が耳に届いた。
「どうした？」
「うん・・・。こうしたくなって・・・。
　このままでいい・・・？」
「ああ・・・。」
　マァムは、後ろから、ヒュンケルの腰に手を回した。ヒュンケルは、その彼女の手に、自分の手を重ね合わせた。
　ふたりとも何も言わず、ただ、素肌のまま、マァムはヒュンケルを抱きしめていた。ヒュンケルもまた、マァムにされるがまま、無言で彼女に背を預けていた。
　やがて、マァムは、体を離すと、ヒュンケルの背中に目を止めた。
　薄明かりしかない今の部屋の中でもわかる。
　そこには、大小さまざまな傷跡が残されていた。
　彼がいかに厳しい戦いを潜り抜けてきたのか、この背中を見るだけでもよく分かった。
　その傷跡は、マァムに、彼に対する畏敬の念を起こさせたが、また、それと同時に、胸を鷲掴みにされるほどの苦しさを覚えさせた。
　この人は、これほどまでに、その身を盾にしてきたのか。
　その明らかな証がそこにはあった。
　マァムは、そっと、彼の背中の傷一つ一つに手を触れていった。
　いたわるように、ねぎらうように、ひとつずつ。
　そして、マァムは、その中で、ひときわ大きな傷に手を触れた。
　それは、右肩から左の腰にかけて、大きく袈裟懸けに切り裂かれた痕だった。
　古い傷なのだろう。薄くなってはいたが、まだはっきりと見て取れた。

マァムは、その傷に、そっと唇を寄せた。
　背にマァムの唇の感触を感じ、ヒュンケルは、軽く後ろに視線を送った。
「マァム？」
　マァムは、彼の背から唇を離したが、そっと、指先で、その大きな傷跡をたどった。
「・・・これ、古い傷ね。」
　ヒュンケルは、得心したように声を上げた。
「ああ。
　背中にあるみたいだな。
　前からよく言われたが、自分では見えないからよく分からん。」
　その言葉に、マァムが驚いた。
「覚えてないの？」
「ああ。」
「そうなんだ・・・。」
　これほど大きな傷を負ったのに、ヒュンケルにはその記憶がない。その意味を、マァムは考えた。
　ヒュンケルの自嘲めいた台詞が耳に届いた。
「背中に傷を負うとは、戦士失格だな。」
　マァムは、囁くように、ヒュンケルに呼びかけた。その声は、心なしか、沈んでいた。
「ねえ、ヒュンケル。
　一番最初にバーンと戦った時のことって、覚えている？」
　マァムがなぜその話を持ち出してきたのか、ヒュンケルはその理由がわからず、驚いたようにマァムに言葉を返した。
「どうしたんだ、急に。
　もちろん、覚えているさ。」
　マァムは、沈んだ声のまま、彼に語り掛けた。
「あのとき、ヒュンケル、私をかばって、背中に攻撃を受けたわね。
　大魔王バーンの一撃を・・・。」
「ああ・・・そんなこともあったな。」
　マァムは、言葉をつづけた。

「あのとき、私の目の前で崩れ落ちた貴方を見て、本当に怖かった・・・。
　私をかばって守ってくれた・・・それは嬉しかった、でも、苦しくて・・・。」
　マァムは、額を軽く、ヒュンケルの背につけた。そのまま、言葉をつづける。
「あのときも、貴方は背中に傷を負っていた。
　貴方は、簡単に、敵に背中を許す戦士じゃない。
　だから、ここに残る傷は、みんな、貴方が誰かを守ったその証なんだと思うわ。」
　そして、また、マァムは、ヒュンケルの背中の傷に指を這わせた。
「こんなに大きな傷なのに、ヒュンケルの記憶に残っていないのだから、よっぽど小さい時か、それか、死線をさまよって記憶を失うくらいだったのかもしれない・・・。
　でもきっと、そのときも、貴方は誰かをかばって、この傷を負ったんじゃないかしら。
　私にはそう思えるの。」
　ヒュンケルの耳に、マァムの言葉が届く。その声は、少し震えているように感じられた。
　マァムはいったん言葉を区切ると、はっきりとした声で言い切った。
「私は、そんな貴方を誇りに思うわ。」
　そう言うと、マァムは、また、後ろからヒュンケルを抱きしめた。
　温かい、彼女の素肌の感触が、ヒュンケルの背に伝わった。
「でも・・・もう、ひとりで戦わせたりはしない。
　貴方の背中は、私が守るわ。」
「マァム・・・。」
　ヒュンケルは、そのまま、マァムに背を預けた。

　カール王宮の自室で、アバンは手紙を読んでいた。
　彼の手元には、相次いで届けられた３通の手紙があった。

どれも、もう何度も読んだものだが、アバンは、飽きずにまたそれを読み返していた。
　１通目の手紙には、簡単な言葉だけが書かれていた。
　文字は丁寧であったが、事務的に、ただ転居を知らせるだけの内容だった。
―ネイル村で、マァムと暮らすことになりました。
　ただその内容だけが書かれており、最後にサインが添えられていた。
　その特徴的なサインを指でなぞり、アバンは苦笑した。
　丁寧な文字も、簡素な内容も、そしてこのサインも、実に彼らしいと思った。
　アバンは苦笑した。
　何でマァムとネイル村で暮らすことになったのか、その理由くらい書いてくれてもいいじゃないのか、と思うし、こうなるまでにいろいろとあったはずではないか、とも思う。
　だが、また、同時に思った。
　アバンは呟いた。
「あなたらしいですね、ヒュンケル。
　それに、知らせてくれるだけ、ありがたい。」
　そうして、その手紙を封筒に収め直すと、アバンは２通目の手紙を手に取った。
　おそらくは、ヒュンケルがアバンに先ほどの手紙を出したことを知らなかったのだろう。
　その手紙には、ヒュンケルとネイル村で暮らすようになったことから始まり、彼が以前ネイル村に来ていたことを知って驚いたとか、村の人々が当時のことを覚えていたこととか、ロカの墓参りをしたとか、ヒュンケルと暮らせるようになって嬉しいとか、そういった詳細が、差出人自身の言葉で丁寧に綴られていた。
　ところどころに、「嬉しい」や「幸せ」という言葉がちりばめられており、その文面の端々から、浮き立つような彼女の心情が伝わるようであった。
　アバンは、頬を緩めて笑みを浮かべた。
　アバンは呟いた。

「読んでいるだけでこちらまでしあわせな気分になりますよ。
　ありがとう、マァム。」
　アバンは、マァムからの手紙を元に戻すと、３通目の手紙を手に取った。
　そこに記された文字に、アバンは視線を落とし、文面を目で追った。
―アバン様、ヒュンケルがネイル村に戻ってきてくれました。
　マァムやアバン様から聞いてはいましたが、実際に彼に会うと、やはり感慨深いものがあります。
　彼は、素敵な青年に成長しましたね。
　我が子のことのようにうれしく思います。
　手紙に綴られた文章に、アバンも嬉しくなって笑みを浮かべた。
　そのまま、読み進める。
　その先には、ヒュンケルを受け入れるにあたって、村長や神父たちへの対応や問題が生じていないことなど、アバンが懸念していたことに対する回答が明確に記されていた。
　そして、その先に、もっとずっと個人的なことが書かれていた。
―アバン様、ヒュンケルは、ネイル村に滞在していたときのことや幼かったマァムのことなどは思い出したようでした。
　しかし、やはり、カールでのことは思い出せないようです。
　あのときのことは、私としても、無理に彼に思い出させる必要はないと思っており、私からは何も言っていません。
　マァムに聞きましたが、ヒュンケルの背中には、カールで負った傷が今も残っているようです。
　残ってしまったのですね。
　あのとき、幼かったヒュンケルが、身を挺してマァムを助けてくれたことを、私は今も感謝しています。
　ヒュンケルは、マァムがいなければ今の自分はないと語っていましたが、それは私にとっても同じことです。
　今後も、彼がこの村で過ごしていくのであれば、私は彼を支えていこうと思います。
　ですが、マァムにもヒュンケルにも、カールでのことは話すつもりはありません。

あのふたりは、もう十分にお互いを思いあっています。
　そこに過去のしがらみを入れる必要はないと思います。
　ふたりには、この先を見て生きていってほしいと思っています。
　私の判断で恐縮ですが、このことを、アバン様にお伝えしたく、筆を執りました。
　文末には、レイラのサインが添えられていた。
　アバンは、手紙を読み終え、息を吐いた。そしてまた、呟いた。
「ありがとうございます、レイラ。」
　そして、３通の手紙を、文箱に戻すと、アバンはバルコニーへと出た。
　この日はよく晴れており、自室から見るカール王宮の中庭の上に、いくつもの星々が輝いていた。
　その無数の輝きを見ながら、アバンは、これまでのヒュンケルとの旅の軌跡を思った。
　それは、アバンにとっても、この星の輝きのような煌めく思い出であった。
　幼かったヒュンケルと出会い、ともに旅をした日々。
　彼を失った後悔に彩られた日の出来事。
　戦いの中での、ヒュンケルとの再会。そして知った、彼の負った重荷。
　戦後、このカールのために、彼が奔走してくれた日々。ようやく、彼との時間を取り戻せたように感じられた一時のこと。
　再度のパプニカの危機と、その後に姿を消した彼。
　そういったヒュンケルとの思い出や彼を取り巻く出来事が、流れるようにアバンの中を通り過ぎていった。
　アバンは、天上に輝く星々をその目に映しながら、呟いた。
「ようやく、貴方は帰るところを見つけたのですね、ヒュンケル。」
　そして、誰よりも彼の幸福を願っていたであろうその人に向かって呼びかけた。
「バルトスさん。
　ヒュンケルは、家族に出会うことができたようです。
　時間ばかりかかってしまい・・・それに、私はほとんど何もでき

ませんでした。
　あの子に人間の温もりを教えてほしいと貴方が願われた、それをヒュンケルは、自分自身で学んでいきました。
　みんな、あの子自身が見つけていったものです。
　貴方の育てた息子さんは、あの頃と同じく、強く、優しい男に成長しました。
　どうか、この先も見守っていってください。」
　そして、アバンは、もう自分の元から巣立っていった、最初の弟子に、心の中で語りかけた。
—ヒュンケル。
　未来は、あなた方若者たちのためにある。
　過去を受け止めながら、しかし、そこにとらわれることも、過去だけを見ることもなく、望む未来に進んでいってください。
　あなたの愛するマァムのため。
　そして、誰よりも、あなた自身のために。

　アバンは、常に、子どもたちの未来のために戦ってきた。
　子どもは、いつか大人になり、自分の足で歩くようになる。
　そして、その若者たちの前に、世界は常に、開かれている。
　戦いのない、共存可能な世界が、どうか、彼らを祝福してくれることを。
　アバンは祈る。
　若者たちの未来のために。